

祖父の詫び状

高尾 光秀

明治生まれの祖父は戦争で兄弟や息子を亡くしていた。そのせいでアメリカ合衆国のことを進駐軍と呼び、米国を想起させるものは家の中に持ち込むことを禁じた。その一番手としてあげていたのが珈琲である。

「珈琲は国民を骨抜きにする罠やから、騙されちゃいけないぞ」と注意喚起していた。

祖父の言い分は一般常識からするとかなり逸脱していたものの、家庭内では絶大な影響力を持った。その証拠に私は高校生になっても珈琲を飲んだことがなかった。味を想像したことはあった。コーヒー味の飴を口にして、そこから飴の部分を引くのである。中々の高等技術を伴うものの、習得しつつあった。そんな私に試練の時が訪れた。初めての異性との待ち合わせ場所が珈琲専門店になったのである。彼女は私にこう言ったのだ。

「二人で行きたいお店があるの、いいかな」

切り揃えられた前髪の下で微妙に揺れる彼女の眼差しは、とてつもなく眩しかった。断る理由などあろうはずもない。

当日の緊張感は生半可ではなかった。敵地に一人で乗り込む覚悟だった。私の心情などまったく知らない彼女は浮かれているように見えた。さらに、学校では三つ編みにしている髪を解き、女子大生風の雰囲気まで醸し出した。さらに動揺した私はメニューを見て追討ちをかけられた。サッパリ分らないのだ。茫然として黙したまましていると彼女が耳元で囁いた。「今日はブルマンにするネ」

ブルマン？ ホットとかアイスじゃなくて？ 何が何だか分からないのだけれど、決められない愚図な男と思われたくないので注文した。

「口内炎なのでレモンスカッシュにします」

これを聞いた彼女の顔から表情が消えた。そして、私を見る目が尖った。案の定、カップル誕生とはならなかった。楽しいはずの初デートは苦いだけのものとなり、私の中に根付いた珈琲に対する憎悪は祖父のそれを超えたかもしれないなかった。

地元に住づらくなったわけではないのだけれど、東京の大学に進学した。家を出たことで禁止事項を一つずつ破った。酒と煙草を試しポルノ映画も観た。それでも、珈琲専門店には入れなかった。祖父の顔だけでなく、彼女の怒りを湛えた顔が浮かぶのだった。

夏休みになり帰省する際、家族を驚かせるつもりで日時を知らせなかった。しかし、玄関

を開けた瞬間に私の目論見は消えた。こともあろうに、珈琲の香りが漂っていたのである。何かの間違いだと思って居間に入ると愕然とした。祖父がガラスコップで珈琲らしきものを飲んでいたからだ。私はその場に立ち尽くした。祖父も同様に私を凝視したまま動かなくなった。突然帰省して驚かせるつもりが逆に驚かされる結果となってしまった。

翌日は気を取り直して臨むつもりでいた。ところが、である。食卓からご飯と味噌汁が消え、焼き魚の匂いもしなかった。食卓の中央で大皿に盛られていたのはトーストとゆで卵だ。そして当然のように、珈琲が湯気を立てていたのである。我が家はいつの間にかアメリカン・ファミリーに変貌を遂げていた。茫然とする私に母の声が響いた。

「こっちの方が楽チンなのよねえ」

伝統や仕来たりは楽チンには勝てないということなのか。あれだけ決まり事にうるさかった祖父も朝からトーストを頬張り、珈琲をすすっている。それも、嬉しそうにである。

祖母の話によると、祖父は六月に市民病院に入院した際、若い看護婦さんにパン食と珈琲を勧められた。そして、その味に目覚めたらしい。退院してからは今までの分を取り戻すかのように毎日二回も食しているという。さらに、母と祖母も病院と家の往復に疲れ、朝と昼は楽チン食事に落ち着いたようだ。

幼い頃より家庭内訓示を朗々と謳っていた祖父に聞きたい。日本人の朝は一汁三菜に始まり、食後の一服は緑茶のそこはかとないう風味を嗜むものではなかったのですか？

そんな問いかけも今や虚しいだけだ。理由はどうかであれ、我が家では古い仕来たりが消えて新しい習慣が芽吹いたのだ。

私も生まれ変わる必要があるのかもしれない。そうすれば、一度壊れた彼女との関係もやり直すことができるのだろうか。

晩秋の頃、東京の下宿に祖父から小包が届いた。同封の手紙には日本人の独創性が珈琲を変えた賛辞が毛筆で記してあった。

「棒状の筒の中に珈琲の顆粒だけでなく、砂糖や乳粉も混在しており、味も見事なり。日本人の英知はこれに極まり」

化粧箱を開けると煌びやかなスティックが整然と並んでいる。手紙を読み返しながら飲んでみるとほろ苦くもあり、甘くもあった。

結びの一文はさらに飛躍していた。

「国際化の進む時代において、和洋折衷は当然のこと。緑茶で一服、珈琲でも一服。相互理解で深まる信頼。これぞ平和の道筋なり」

読めば読むほど「祖父の詫び状」に思えた。